

にれのき

“にれのき”はエルムアカデミーが
父母・OB・サポーターに向けて発信する情報誌です

特集 私たちの2006年



01 2006

<http://elm.m78.com/>

私たちの2006年

その課題と展望

特集

アカデミー部門

安心と信頼を寄せてもらえるエルムに

代表 矢沢宏之

昨年一月号の「にれのき」で、

二〇〇五年のエルムが取り組むべき課題として「地域に根ざすことを土台に、低学力問題とニート問題に風穴を空けていきたい。そして、何よりも05年中にLDやADHDの子どものためのNPO法人を設立していきたい」と記しました。

目標であったNPO設立は、昨年4月に任意団体として教育サポートセンターNIREを立ち上げ、10月に東京都から正式にNPO法人の認証受けました。また、五団体から百万円を超える助成金も受け、心理検査キットの購入や行事の助成に使わせていただきました。また、中塚の日本LD学会による特別支援教育士の研修も順調に進み、今年の夏には修了し、その先の資格取得を目指しています。これらの一連の活動によりLDやADHDなどの特別な教育的ニーズを持つ子どもたちへの指導は、大きく飛躍ができたと思っ

ています。

今春からは公立学校においても特別支援教育が実施されることとなります。港区では小中学校とNPOが共同して「目の前の困難な子どもに手をさしのべたい」と支援が始まっています。品川区をはじめとしてまだまだ特別な教育的ニーズが必要な子は多くいます。他のNPOや学校・行政とも連携し一人でも多くの子どもたちへ対応ができるようにしていきたいと思えます。

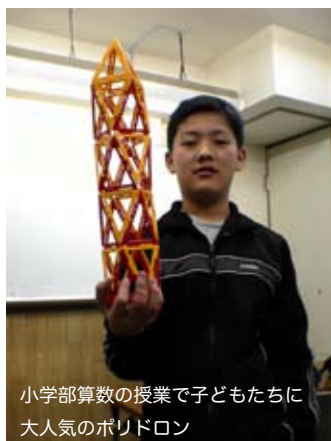
学びについても「低学力の進行」の大合唱で今春からの教科書はページも内容も増になります。品川区においては小中一貫教育実施で授業数の増が見込まれ、他の区でも授業数が増える傾向にあります。すでに一部の中学校では土曜日登校や七時間授業が始まっています。増えた授業数を旧来の知識詰め込み型の授業にしていけば、「学びからの逃走」を増やすことになってしまい、学びがより個別化分断化されてい

くことでしよう。

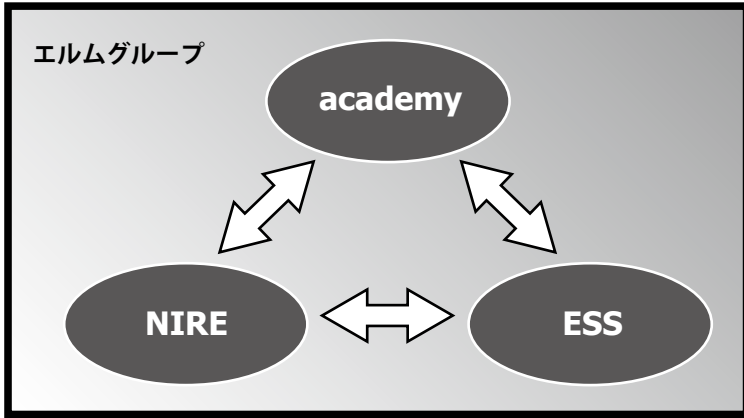
しかし、学びは集団でこそより深い認識をつくれるものです。もちろん、顔かたちがひとりひとり異なっているのと同じで個々の子どもたちの認識は多様です。ですから、それらに合う多様なアプローチをしていくことが必要です。それと同時に、その多様なアプローチを子ども同士が分かち合うことで認識がさらに深まり学びを深めることができます。認識が網の目のように結びつき広がっていくことが学びの大きな要素であり、それを仲間とともに生み出すことが人間への信頼感もつくりだすことにもつながっていくと考えられています。

エルムでは、より一層の授業研究を深めていきます。そのためにも本号で触れているような授業実践向上プロジェクトをはじめとした取り組みを進めていきたいと思えます。

ESSはホームページ制作をはじめ



小学部算数の授業で子どもたちに大人気のポリドロン



これまで20年にわたって品川で教育実践を積み上げてきたエルムは、03年に、地域での若者の雇用創出のためにESS事業部を、また、05年にはLD・ADHDなどの子どもたちのための教育支援事業として教育サポートセンターNIRE（NPO法人）を立ち上げました。ヒト・モノが、お金ではなく、心でつながりあう地域づくりのために、今年も活動を続けていきます。



私は、二年前のエルム二十周年を迎え、さらには、今年は今までの枠をもう一回り広げた事業にもチャレンジしていく決意です。



LD（学習障害）・ADHD（注意欠陥多動性障害）・高機能自閉症（アスペルガー症候群）など特別な教育的ニーズを持つ子どもたちを支援するために、昨年5月に設立した教育サポートセンターNIREですが、10月19日付で、東京都より特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を獲得することができました。これにより、教育サポートセンターは任意団体から法人格を持つ団体となりました。

NPO法人格を持つことにより、法

これまでの経験をいかし、飛躍の年に…

代表 中塚史行

特定非営利活動法人 教育サポートセンター NIRE 部門

えるにあたっての「にれのき」で、「不安を安心に」「不信を信頼」ということを書きました。まさに昨年の一連の社会諸事件はこのことを痛感させられるものでした。

すでに何年も前に地元の工務店さんの話で「家を建てる時柱や土台は見えないものもある。儲けたかったらそこを手抜きをして儲けることができる。しかし、年月がたつうちに必ずそこから綻びがでる。顔のつながっている地

元で商売をしていたら決して手抜きはできない」という話を伺ったことがあります。

エルムの携わっている教育の仕事もまさに十年先二十年先に結果が出るものです。そして、顔が見える地域という点でも「安心と信頼」は欠かせません。あらゆる面で「安心と信頼」を大きく寄せてもらえるようなエルムにしていきたいと思っています。



小学部キャンプから

人名での銀行口座の開設や各種契約などが行うことができるようになります。また、会計書類の作成や書類の閲覧など、法に定められた法人運営や情報公開を行うことが義務づけられているため、社会的にも信用を得ることができるとされています。

今後は、行政や専門機関とのネットワークを広げながら、社会的な責任を持つ団体として、地域に根ざした活動を積極的に進めていきたいと思っております。

今年からは、子どもたちの状況をより正確に知り、具体的な手立てを導くように、WISC-IIIやK-ABCといった心理アセスメントの活用を現在

準備中です。また個別支援計画(IEP)を作成し、一人ひとりにあわせたプログラムを具体的にあらわかにしていくこともめざしていきたいと思えます。

また、学校関係者や保護者、地域の方々を対象に、特別な教育的ニーズを持つ子どもたちを理解と、家庭や学校での関わりの工夫やアイデアを実践的に学ぶ「教育セミナー」を開催していきたいと思っております。

少しずつではありますが、小学校や通級指導教室、家庭あんしんセンター、スクールカウンセラー、LD親の会な

ど、地域でのつながりも広がりつつあります。

新しい分野での活動のため、試行錯誤の連続ではありますが、子どもたちが豊かに成長できるように、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

なお、教育科学研究会編集『月刊教育』二〇〇六年二月号に中塚が実践レポートを寄稿いたしました。子どもたちへのまなざしと、教育サポートセンターNIREの設立までの経過をまとめたレポートです。ぜひご覧ください。

ESS事業部部門

今年あらたにもうひと勝負を...

代表 小原祐二

ESS事業部では、05年は新規事業を開拓することはず、事業部立ち上げから、この3年間で培った技術とつながりを最大限いかすことに重点を置いて活動を展開してきました。

事業収入の大きな割合を占めるコンピュータ部門では、ホームページの作成やパソコンサポートなどで昨年を大

きく上回る実績を築くことができました。そのなかでは、私たちが望んでいた地域の保育園や団体・事業所、個人など、地域に密着した営業活動を展開し、お客様と顔の見えるお付き合いをさせていただくことができました。

医療系事務を中心とした業務委託請負の分野でも、これまでの信頼の上に、

新たな受注もいただけるようになりました。



親子企画での子どもたちが出店したたこ焼き屋「はちご屋」

また、なによりも私たちがうれしく思うのは、ESS事業部の業務充実によって、エルムOBの若者を新たに複数名、アルバイトや契約社員といった形で雇用できたことです。小さな小さな一歩ですが、こうしてひとつずつ「地域をつくる」というステップを重ねていくことが私たちの使命であると感じています。

そして06年、私たちは新たな事業計画を温めています。詳細は次号「これのき」でのご報告ということになりますが、地域で生まれ育った若者が、地域で胸をはって働くことのできる、そんな「まち」をつくるために、今年もまい進していきたいと思っております。

書籍紹介

シリーズ

未来への学力と日本の教育

エルムが親御さんからよく言われる言葉の一つは「エルムで子どもたちは学力がついているのですか」という類のもの。胸を張って「もちろん」と答

えます。しかし、いわゆる「学力」とらえかたは千差万別、「定期テストの点」「偏差値」「通知票の評価」「入試の結果」「学習への態度」などなど多様



明石書店

- 第1巻 希望をつむぐ学力 久富善之・田中孝彦編著
- 第2巻 習熟度別授業で学力は育つか 梅原利夫・小寺隆幸編著
- 第3巻 フィンランドに学ぶ教育と学力 庄井良信・中嶋 博編著
- 第4巻 ことばの教育と学力 秋田喜代美・石井順治編著
- 第5巻 ニート・フリーターと学力 佐藤洋作・平塚真樹編著

それらが複雑に絡み合っているのです。エルムの「もちろん」は何か空虚に聞こえてしまうのです。

ですから、エルムにとって「真に問われているのは、これからの世界に生きる子ども・若者たちが身につけるべき学力とはどのようなものか——学力ということばそのものから問い直すこと」がいつの時でも必要になります。

そして、研究成果の上に作りあげら

雑誌「教育」2月号

今回の小特集では、思春期・青年期を生きる軽度発達障害をもつ子どもたちの学校教育の充実と自立のために、教師・地域の支援者・保護者らは子どもをどのように理解し、どのような教育支援をめざしたらよいかを、LD親

れたこれらの学力像を実践的に証明していくことも同時に必要です。新しい学力の視点を私たちがつかむことでより深くそしてより高い観点から教材を吟味し子どもとともに学ぶことが可能になります。

「未来の社会への希望と一人ひとりのしあわせをつなぐ学力」を現実の世界に作り出していきたいと思えます。

の会、スクールカウンセラー、教員など様々な分野からレポートしています。中塚は地域支援の観点から実践レポートを寄稿しました。

本レポートでは、特別な教育的ニーズを持つ子どもたちとの関わりの中で、紆余曲折をへながらも仲間とともに、仲間の中で成長したTくんの姿をまとめました。教育サポートセンターNIREの設立も、Tくんとのお会いがなければ実現しなかっただろうというのは、おかげさな話ではありません。ぜひお読み下さい。



授業実践を支える若手教員

日々子どもたちと向き合う「授業」はエルムの教育実践を支える土台であり柱となるものです。その実践は専任教員が中心となりつつも、エルムOBの大学生などを中心とした若手教員が支えています。毎年多くの青年がエルムに来て、教員として子どもたちの前に立つこととなります。私たちが多くの若手教員を迎えるのは、エルムは子どもたちの成長の場であるとともに、そこに関わる青年も、ともに成長する



教員研修

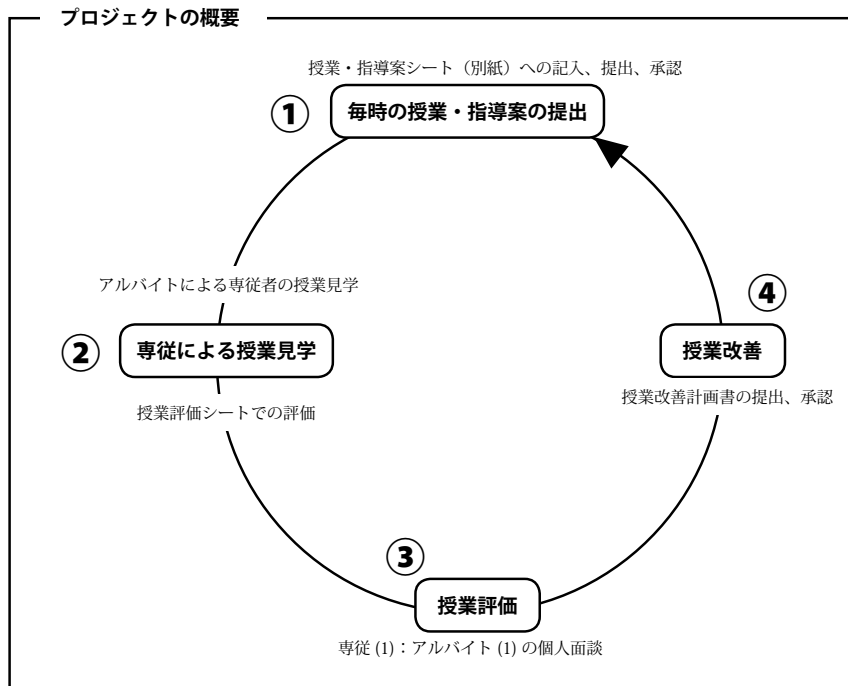
毎年4月に開かれます。『エルム憲章』と『授業論』と『学ぶ』という二つの意義を受け、全体で討論をおこないます。(左ページ資料参照)

エルムの授業力を鍛える 『授業実践向上プロジェクト』

場として存在しているからです。いずれ社会の誠実な担い手として、エルムでの経験を学校現場などでいかしてもらいたいと考えているからです。子どもたちの全面発達を支える教員の養成という観点からも、エルムの教育力の向上をはかるという観点からも、若手教員の育成は私たちの大きな仕事の一つと自覚をしています。

学ぶことの意味を問い続けて

若手教員の育成に欠かせないものとして「教育理念」があります。若手教員は子どもたちの前に立つと、どうしても小手先の技術やハウツーに頼ってしまいがちです。しかし、しっかりとした教育理念をもたなければ、さまざまなに変化する子どもには対応できません。いま子どもたちは、学ぶことの意味やめあてが非常に見えにくくなっています。エルムで見えている子どもたちも学びへの意識が脆弱になってきて



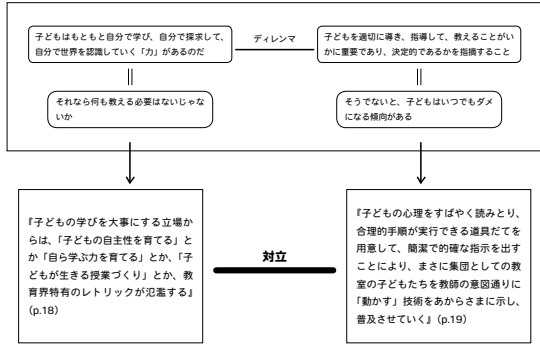
本文にも書かれている、授業実践向上プロジェクトの模式図。納得いくまで目的や意識を共有しあい、実践を積み上げていく、この丁寧さがエルムが創設以来貫いているスタイルです。

1. 「人はなぜ学ぶのか」という根源的な問い

- 『学ぶ』ということは、予想の次元ではなく、むしろ希望の次元に生きることでないだろうか。「こういうことが、いついつまでできるようになる」ことを目的とするのではなく、いつどうなるか、何が起こるかの予想を超えて、ともかくよくなることへの信頼と希望の中で、一瞬一瞬を大切に、今を生きているということ」(p.9-10)
- 『学び』とは、終わることのない自分探しの旅」(p.11)
- 『学習内容』を外から勝手にきめて、それを何がなんでも「自ら進んで、意欲的、興味・関心を持って」取り組ませるにはどうしたらいいのか、という話ほともとと無理な注文」(p.11)

2. 「教える」と「学ぶ」のディレンマ*

- 『子どもが自ら学ぶことへの信頼と、にもかかわらず教えることの必要性との間のディレンマ』(p.13)



memo

*ディレンマとも、自分の思い通りにしたい二つの事柄のうち、一方を思い通りにすると他の一方が必然的に不都合な結果になるという苦しい立場。悩ばるみ。

いる、より正確に表現するなら、学ぼうという意欲が子どもによっても大きく開いてきていると感じます。

こういう状況にあつて、「なぜ学ぶのか」「勉強は何のためにしなければならないのか」という子どもたちのもつ問

いに対して、「学ぶ」ということを「食べる」ためではなく、この社会のなかでどう自立し、よりよい自分をつくっていくか、という文脈からとらえ直し、子どもたちに語り、子どもたちの問いに答えられる奥行きのある授業を紡ぎ出すことが求められています。このことはエルムが創立以来一貫して大切な

こととして取り組んできたことでもあります。

『授業実践向上プロジェクト』始まる

以上の点を考慮しつつ、エルム創立当初より、若手教員の「授業」の質を高めていくことを最重課題としてきました。これまでも、毎年4月に行われる『教員研修』、毎月開催される『教員会議』・『学科会』・『学年会』などをおして精力的に取り組んできました。しかし、時代がもたらす子どもたちの

変化や学校の変化にしっかりと対応できる実践をさらに追求していくために、私たちはもう一度エルムの授業を見直し、その質を向上させていく必要があると判断しました。

昨年10月から『授業実践向上プロジェクト』という試みが実施されています。これは〈毎時の授業・指導案の提出〉〈教員集団による授業見学・授業評価〉〈授業改善計画書の提出〉〈ビデオ撮影による授業記録〉という一連の取り組みをおして、毎回の授業のレベルを上げるとともに、そこで得られたさまざまな教訓をエルムの教員全体の教訓として積み上げていきます。そして、今後、その教訓は学校現場などにも幅広く発信していくつもりです。

集団の教育力を活かす

この取り組みでもう一つ大切にしているのは、教員集団です。授業の力量を問題にするとき、ややもすると個人の問題として片づけられがちですが、私たちは個人の力量・資質の問題、個人の努力や姿勢の問題だけでは位置づけず、集団的な英知を結集して乗り越えていくという立場で取り組んでいます。一人ひとりがまずは自分の実践と向き合い誠実に努力する、しかし問題

は一人で抱え込まずに、教員集団全体の問題として考え、エルム全体の教訓として積み上げていくことを大切にしています。教員一人ひとりのところでは様々な悩みや葛藤を抱えています。それを隠さずに開示し、相互評価と相互批判をおこない、よりよい実践を目指して高め合える集団、これこそが私たちが大切にしたい教員集団です。教員同士がしっかりと手をつなぎ、これからも豊かな学びをつくっていききたいと思えます。

教員会
毎月1回開催されます。これまでのエルム全体の到達と課題、今後の全体方針について全教員で議論をおこないます。「模擬授業」は毎回必ずおこないます。





田崎 裕美子

私がエルムに興味を持ったのは、「体験」を通して、「なかま」を育て「学び」をつくっていくという姿勢に強く惹かれたからでした。それを具体的に体験することになったのが、小学部『特カリ』たこ焼き屋出店の活動です。

たこ焼きを作って売るまでの全過程を一人でできるようにすることを目標に、話し合いを繰り返し練習を重ねました。それは子どもにとって決して容易にこなせることではなかったはずですが、しかし、誰一人途中で意欲をなくすことなく、本番の厳しい寒さに根を上げることもなく、全員

数のたこ焼きを売ることができました。私は、子どもは心から楽しいと思える活動に對してこんなにも夢中になれるものなのだということ。また一人一人の力や相手を思いやり助け合う姿に、感動を覚えました。

私は、臨時教員として小学校に関わってきました。そこで、子どもの気持ちや置き去りのまま、形ばかりの活動が行われている場面を少なからず見てきました。しかし、本当に子どもの悩みや問題を改善するために必要なのは、共に悩み考えてくれる仲間がいること、自分をさらけ出せる場所があることだと思えました。そして、それがエルムではできるのだと。

教員としてというより生徒のように、エルムのような姿を知り、驚き感動する日々です。この先「先生と生徒」としてではなく、「人間と人間」としてエルムの子どもたちと関わっていききたいと思っています。

5年目を迎える「親子もちつき」

小学部出店 たこやき 「はちご屋」

今年度の企画は、楽しい「話し合い」の末、一〇〇を超えるアイデアのなかから全員一致で「たこ焼き」に決定。味の追求はもちろん、お店づくりにもこだわりました。話し合いのテーマは『どうしたらお客さんに美味しく食べてもらえるのか』

実際のお店を見学して一人ひとりが発表し、美味しく食べてもらう秘訣を探っていきました。そして、あいさつやかかけ声の仕方、また、笑顔や若々しさが大切だということを発見し、何度も練習をおこないました。たこ焼き作りは、元たこ焼き屋さんの指導を受け、

◀「子どもたちは元たこ焼き屋さんの指導を受けて練習を重ねました」



自信をもって当日に臨むことができました。本番当日、『はちご屋』自慢のたこ焼きは、最高気温5度という寒さに負けない元気なかけ声と笑顔に包まれ、二〇五皿を完売しました。



▶「子どもたちはほとんど休むことなく焼き続け、四一〇〇〇円の売り上げを達成しました」